

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可
平成21年2月1日発行（毎月一回一日発行）
俳句雑誌 沖 第40巻第2号



俳句雑誌[おき]

2
月号

沖
發行所

飾り焚く

能村 研三

若者不在の俳句

本年の俳句総合誌「俳句」と「俳句界」の一月号では、それぞれ「俳句の未来予想図」「若者不在の現代俳句を考える」というタイトルで、最近の若者と俳句について論じている。

昔から若者が多いと俳壇で定評のあった我が「沖」でも若者の参加が減っている。私たちが二十代の頃は福永耕二の指導の下に「二十代の会」という句会が毎月開かれ、この例会の他にも時間があれば有志で吟行にも出かけた。その後、これら二十代の人たちの年齢が上がるにつれて、「舵の会」という名称に変えて存続はしたものの、後輩たちが余り入ってこないで、年齢構成がどんどん上がってしまった。

この傾向は何も「沖」だけのことでなく、俳壇全体の風潮のようでもあるが、仕事や家事など生きることとに精一杯で余裕の無くなった若者が多くなったことによるものなのだろう。

暮から正月にかけて「派遣村」という言葉がとびかうほど、職につかない人たちが増えてしまった世の中では中々俳句にと言っても難しいの

太鼓打つかかと構への淑気かな

所作はみな間髪容れず寒行僧

湯気立てて黙り通すも力かな

偏差値は要らず勢ひの寒稽古

花びら餅ごぼう透かしを手のにせて

飾り焚くまあるい穴を掘りにけり

半生を生地住まひや薺打つ

柴崎英子句集『絹の波』上梓

絹波の音してひらく寒牡丹

甲 富代句集『高野槇』上梓

千年の槇の秀つ枝の淑気か

鈴木翠峰（伸）句集『余燼』上梓

余燼より生れ出づるもの初茜

かも知れない。

高齢化が急速に進み、若者自体が少なくなっている世の中ではあるが、是非この若者たちにも俳句の面白さを知ってほしいものである。俳句は出来る限り若いうちから作ったほうがよいのは明白である。

若ければ、恋や子育てなど若くなくては経験できないことも俳句に詠むことができるのである。

是非本年は、「沖」にも若い人たちが参加してくれることを願うものである。



能村 研三

寒

雀

林

翔

栖鳳の雀には似ぬ寒雀

空腹を知らぬ雀と寒に入る

盗難車あはれ空き地に年を越す

松飾りのみがめでたや病夫婦

歳時記に在らぬ季語かな痒み初め

ニユー・スあはれ遠き国には殺し初め

冷めし茶が咽喉に微音や雪催ひ

大口をあける児飛雪食べんとて

若き日の泣声も欲し老の冬

小澤征爾氏

全身の筋肉で指揮冬の汗



林
翔

蒼茫集



畝百条 千田 敬

案の定冬帽なくし旅半ば
大仏まで鹿の案内に委せ往く
数へ日や句点をつけて稿終へて
空白は多忙の日かも日記果つ
白菜の畝百条や風うまし
ひむがしに冬満月の孤高かな

先 師 望月晴美

朴落葉し尽してふと先師なる
子の家へ二往復する冬日和
忘るるといふ安らぎも茶が咲けり
着いてすぐ波止に出てみる小春風
風邪らしき子はどことなく素直なる
日向ぼこ近くに亡夫のゐるやうな

個 室 辻美奈子

縄文人末裔根つから焚火好き
枯野ゆく二足歩行の頼りなし
茶の花の蘂の黄まみれなりしかな
手袋の指の個室にをさまりぬ
さざんかやひつそりと家冷えてゆく
泣くこととちがふかなしみ糸編む

生き生きと 千田百里

俳諧も夫も悪友冬三つ星
強情も情のうちなり空つ風
大根のいそいそ縮む男晴れ
冬耕のもののお振りや髪束ね
案の定しぐれてにしんそば美味し
生き生きと母音はたらき年暮るる

恢復期

北川英子

逆姿（さかすがた）湖に沈めて山眠る
括られし残菊いつそ散りたかろう
冬桜遠しうすうす恢復期
ボージョレーヌーボー彼携へて来る予感
冬霧の深むや茫と灯台光
庭師いま仕上げしばかり冬満月

ランナー

遠藤真砂明

青空へ窓開けて剥く冬りんご
棟上げの封を切つたる寒造
時雨るるやめをと並びに潮仏
寒雷の青き火柱胸に立つ
海鳴りのつつぬけ晴や冬桜
ランナーに風のかがよふ冬木の芽

鮫鰯吊る

松本圭司

鮫鰯を吊る異次元を吊るやうに
流木の骨投げ入れて浜焚火

イージス鑑見てより咳の俄かなる
夕ぐれて急に冬めく下駄の音
手袋に指ゆきわたり外出す
やや強き風のかたちに落葉舞ふ

黄金分割

辻直美

伸し餅の黄金分割してゐたり
花宅急便木枯しと来て長四角
白黒のポールニューマン若し冷たし
板塀を竹馬の背のはなれたる
はふはふと一人の息の鰯大根
根気よく泣いてゐる子の耳袋

別 縄

久染康子

連山のすたとんと暮れし葉喰
自然薯の地底に老いし髭ならむ
もがり笛外門のカヌー小屋
綿虫の霧に紛れて遠出せり
網干場別縄張りて大根干す
大マスク目が仕事する試験官

潮鳴集



マスクの眼

古屋

元

枯野見て来しを眼科に覗かるる
鳩の胸ぴんと勤労感謝の日
エレベーター開くぎつしりマスクの眼
ささやかな自分史セーターほぐしをり
暮るる上野檻をもたざる寒鴉

おはやう

高木
嘉久

初霜の上におはやう交差せり
決勝の敗者が見上ぐ木守柿
極月の監視カメラの三十度
古時計の午後四時早し雪催
白息や二度目の定年言ふ守衛

銀色

掛井
広通

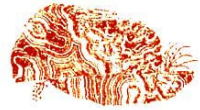
プルタブの音も銀色クリスマス
母の手の小さき惑星毛糸編む
御手玉に蜜柑が一つ紛れたり
冬銀河てのひらに星生まるるよ
噓して生命線の伸びたるか

雪もよひ

小嶋
洋子

雪もよひ個人情報保護シール
パイ生地の中のスープや聖誕祭
小春日和の椅子のねぢ浮いてをり
寒波くる渦巻状の金束子
どこからも目の合ふ冬の肖像画

沖作品



能村研三選

東京

藤原はる美

一村が大根干してみな達者
清張のモノクロ映画冬怒濤
起ち上がる波の切つ先冬に入る
海を来る光ファイバー島小春
廃業の置屋の土塀柚子明り
初時雨銚子の地図を屏風折り
諍はず露も地球も丸だもん
玻璃に湯をぶつかけて挑む冬怒濤
風や角に葉屋荒物屋
雪催ひ惚けし母に褒め言葉
木守柿色濃く発信してをりぬ
新蕎麦打つお国説りを入れながら
冬用意まだかと風の戸をたたく
並木路は街のオアシス紅葉濃し
綿入の田舎縞着て素直なり

市川市

和田 満水

千葉

上田 玲子

東京

七種 年男

冬の雁伊吹嶺うすき翳放つ
磨かれてピカソの赤となる林檎
鰯捌く漁師言葉の生一本
武蔵野の空は藍いろ竜の玉
海原の沖に小船の日向ぼこ
ルルドの水汲むや秋声木の間より
身に入むや木目摩滅の踏絵板
隠れ地のどれも小ぶりの藪椿
出エジプトの群めく冬の列福式
降誕祭通奏低音なるは愛
ふれやまぬ針身のうちに紅葉かな
黄落や「ありがとう」のみ言ふ別れ
秋風や花の紅染む夫の骨
もたれぬし背はづさるる寒さかな

長崎

柿本 麗子

市川市

荒井千瑳子

沖作品 15句選評

*

能村研三

一村が大根干してみな達者 藤原はる美

おおらかな句である。ある意味では現代に求められている日本の理想的な原風景なのかも知れない。若者はこぞって都会に出てしまい、田舎は老人ばかりの世界。しかし、その老人同士がお互いに手を携えて一村を守り抜いている。一村のいたるところで大根干しが始まった。若者がいない寂しさはあるものの、そんなことにめげることなく皆健康で生き生きと暮らしているのである。

初時雨 銚子の地図を屏風折り 和田 満水

銚子の勉強会での収穫作品の一つ。外歩きに地図は欠かせないが、その折り方もいろいろある。中央からまず谷折りにして順次折りたんでいくようなやり方もあれば、縦に細く屏風のように折ってから横に一、二回折るようなものもある。この句の背景には、銚子の景勝地として知られる、『屏風ヶ浦』の存

在もあったことも頷ける。この日は生憎の時雨模様で、手元が不自由であったので、この屏風折りの地図は大変役立った。

木守柿色濃く発信してをりぬ 上田 玲子

木守柿の句としては、新しい感覚の句である。柿の実をすべて採らずに一つだけ残しておく。来年もよく実がなりますようにという願いからか、あるいは全部採ってしまったら鳥たちが可哀相だからという気持による習慣がある。木のでっぺんに一つぽつんと残された柿は、なかなか風情がある。一つの灯のようにも見えるが、大空に向かって何かを発信しているようにも思えた。

磨かれてピカソの赤となる林檎 七種 年男

ピカソの絵の作風は、晩年になって現実的になり情熱的な赤を取り入れるようになり「赤の時代」と呼ばれるようになった。目の前にある一つの林檎だが、よく磨かれていて真っ赤な光沢を放っていて美しく、また美味しそうでもある。日本で作られる林檎は赤々と見栄えも美しい。正に光沢を放つ真っ赤な林檎の色はピカソが描く情熱的な赤そのものでもあった。

身に入むや木目摩滅の踏絵板 柿本 麗子

十一月の終りに九州大会が長崎で行われ、私もお伺いした。二日目に有志で遠藤周作の小説「沈黙」の舞台となった「外海」(そとめ)に吟行をした。この句はその時の句であると思うが、今でも隠れ切支丹の悲しい歴史を語る踏絵板などが残されている。木目が摩滅されているという現象の中には深い人々の悲しみもあるのだ。(以下略)